

## 食から文化を考える ー日本史研究への招待ー

一橋大学大学院社会学研究科教授 若尾政希

### はじめに

はじめまして。一橋大学で日本史を教えております。専門は日本近世史で、思想史を専攻しております。安藤昌益という思想家の思想形成過程の研究や『太平記』が江戸時代にどう読まれたのか、というような本を書いて来ました。今回、依頼されて食文化に関わる講演をすることになりました。なんで若尾がこんなテーマで話をするのか、といぶかしく思われている方もおられるのではないかと思います。しかしながら、実は、今回のテーマに掲げました「食から文化を考える」という内容の講義を、20 年程前、1990 年代初頭に作り（東北薬科大学の一般教養「日本文化史」）、現在もときどき行っています。ただし、もっぱら他の大学でやっていて、一橋では十年程前に「歴史学」で講義して以来、ながらく御蔵入りしております。そんなわけで、今回図書館で肉食に関する展示をやることになって、講演を依頼されたときには、隠していたわけではないのですが、なんでバレた（？）のだろうか、とちょっとびっくりしました。

後に述べますが、「食から文化を考える」という講義は、もともと通年で作ったものですのでふつうにやると 20 数回、短縮版でも十数回の分量になります（いまの大学は半期の授業が多くなりましたので、もっぱら短縮版でやっています。教育も研究もスケールが小さくなってきているように思います）。もちろん今日私に与えられた時間は、一時間程しかありませんので、全体をお伝えすることはできません。私自身がなぜ食にこだわるのか、問題意識に関わる部分を少しだけお話させていただきます。

さきほど、思想史を専攻していると申しました。思想史と聞くと、理屈ばかりで小難しい学問だという印象をお持ちの方が多いと思います。確かに、これまでの思想史にはそのような面もあったかも知れません。しかし私は、現代を生きている私たちにとって非常に身近であるべきだし、誰もが学ばなくてはならないものだと考えております。次の文章をご覧ください。これは、昨年 4 月の岩波書店の『図書』（758 号、「天変地異の思想」2012 年 4 月）に私が書いた文章です。

ところで、これまで、思想史は難解で特異な学問とみられてきた。だが、その時代の人々の意識・思想を把握することは、時代や社会の理解に欠かせない。むしろ時代を読み解くために必須で身近な研究方法であるべきだ。ただし、意識・思想に焦点をあわせても、「誰<sup>だれ</sup>某はこう

考えていた」と個別事例を羅列しても時代は捉えられない。ではどうするのか。私は、人々が共有していたであろう通念・常識に着目したいと思う。当時の人々に通有の、物の見方をまず押さえようというわけである。

「現代の通念・常識とは何か」。<sup>いま</sup> 現今を生きているのだから、簡単に答えられると思いがちだが、これは非常に難しい問いである。無意識に従っているからこそ通念・常識である。成長していくなかで知らず知らずに身につけてきたもので、社会を滞りなく動かすための潤滑油のようなものでもある。それに逆らうと、「あいつは常識を知らない」と非難される。通念・常識は普遍・不変であるような顔をして、我々を支配し束縛しているのである。

では、どうしたらそれを意識（対象化）できるのか。二つの方法がある。一つは生まれ育った地域から離れてみる。国内でも国外でも、別の地域に行ってみると、これまで身につけてきたことが通用しないという体験をする。「外国に行って、日本が分かった」ということもよく言われる。もう一つは歴史を振り返ること。たとえば日本に住む現代の我々は平気で肉を食べる。しかし江戸時代には、肉食はケガレとして忌避された。病気にかかったときに飲む薬に、動物の肉に由来するものが使われていると、その服用を拒否する人さえいた。なぜ肉食忌避の通念が形成されたのか、またそれはいかに克服され現代の肉食文化が形成されたのか。こうした考察を通して、通念・常識は時代のなかで作られたものであることが分かり、それを対象化できる。歴史研究は、過ぎ去った時代を対象とした学問であるが、現代の我々自身をも相対化できる。新たな通念・常識を作り新しい社会を構想することにも寄与できるのである。

ちょうどここに肉食をケガレとして忌避する意識に言及しています。信じられますか。このような社会通念に囚われていた社会が、かつてこの列島にあったのです。それがいつのまにか無くなって、今日の肉食文化に変わってきています。本講演では、さまざまなレベルの通念・常識があるなかで、私たちの生活に身近な衣食住の、食に焦点をあわせ、食をめぐる通念・常識に光を当ててみたいと思います。

## 1. 授業実践から～問題提起はクジラから

次に挙げたのは、「食から文化を考える」と題する講義のシラバスである。

歴史の研究は、過去の時代や社会のイメージを捉えることを一つの目的としていますが、そのための研究視角として私が注目しているのは「社会通念・常識」です。ある時代・社会の人々にとっての社会通念・常識とはどのようなものか。それはどのようにして社会通念・常識となったのか。またいかにして社会通念・常識でなくなったのか。このような社会通念・常識に目をつけることによって、時代や社会をいきいきと描くことができるのではと考えています。

本授業では具体的に、衣食住の「食」をめぐる社会通念・常識を取り上げたいと思います。「あなたはクジラを食べたことがありますか?」「クジラを食べることについてどう思いますか?」、「あなたは牛肉を食べますか?」等という身近な問いを次々に議論することによって、人類誕生以来の人類史と日本列島に人びとが住み始めて以来の日本列島の社会史(日本史)を考えてみたいと思います。

歴史学の研究対象は過ぎ去った時代ですが、本授業を通して、私たちが生きている現代という時代がいかなる時代なのかについても明るみにすることができると思います。

このシラバスをながめるだけでも、「食から文化を考える」という授業が、狭い意味での食文化史ではないことはわかっていたのではないかと思います。この授業全体の問題提起として、私は1991年から、1990年に起きたイルカの集団上陸事件を取り上げています。以下、そのさわりを述べてみよう。

### 1) イルカの集団上陸事件とは?

1990年11月2日夕方から3日早朝にかけて、長崎の五島列島福江島にある三井楽町という漁村が世界の注目を集めました。何が起こったのかというと、イルカが集団上陸したのです。イルカが集団で砂浜に乗り上げ、死んでいった。その数約600頭。三井楽町は、町制50周年記念祝賀会の当日であり、その報道のために来ていたTV局カメラは、この珍事件を撮影して全国に放送しました。当時、テレビや新聞、写真週刊誌などでその様子を見た人も多くいると思います。

この事件は、日本国内だけでなく、外国のマスコミの取り上げるところとなりました。その取り上げ方が非常に大きな問題になったのです。たとえば、イギリスの新聞ツデー紙は、大型カラー写真付きの一面トップ記事として、「全世界の恥」の見出しで、「六〇〇頭のイルカが棒で叩き殺され、殺害者はクレーンやトラクターまで持ち込んで死体の山を防波堤まで運んだ。イルカの肉が豚肉や牛肉より安く日本で出回っている」と指摘し、また「日本政府スポークスマンは「大虐殺」の事実を認めることを拒否した」と報道した。同じイギリスのデーリー・スター紙は「ジャップが生きたイルカ数百頭を屠殺」のセンセーショナルな見出しで写真入りで報道し、一流紙であるデーリー・エクスプレス紙やガーディアン紙も同じ調子で報道したという。「ジャップ」とは、日本を侮蔑するという語、差別用語です。この語を公然と使っていることから、彼ら海外のマスコミが冷静でないこと、激こうしていること、怒っていることが分かります。記事の内容も、重大な事実誤認があり、冷静なものではありません。事実はイルカは勝手に砂浜に上陸してきたのに、それを、イルカを浜に追い込み棒でなぐり殺したと報道しているのです。確かに、住民は棒を持っ

ていました。ただし、なぐり殺すためではなく、まだ息があるイルカを海に押し戻すために。何が彼らをして激こうさせたのか？、このような事実誤認をさせたのでしょうか？

## 2) 鯨を食べるということ

実は彼らの報道の中に、事実があります。その事実とは何かというと、住民がイルカの肉を配分し、食料としたということです。日本人は、鯨・イルカの肉を食べてきました。国際捕鯨委員会の決議により、1987年の漁期から商業捕鯨の全面禁止が実行されたのですが、それ以前には、日本は世界第一の捕鯨国でした。

一九八二／三漁期の鯨の捕獲頭数

日本 四四四三頭 ソ連 三三九二頭 ノルウェー 一八六九頭

小型の鯨類であるイルカの漁は、地方的な小規模のもの以外は、日本に限られています。先ほどの五島のほか、三陸（岩手・宮城県沖）、伊豆、和歌山県、沖縄の名護などで年間二万頭前後が捕獲されて、なべ物、焼肉、刺身、干物などとして消費されていた。「いた」と過去形でいうのは、イルカ漁に対する国際的非難のため、公然と漁ができず、よって信頼できる統計が無く、現在どの程度行われているか分からないからです。イルカについては、鯨の漁ができなくなったのでむしろ増えたと言われています。日本は世界第一の捕鯨国であり、世界第一の鯨肉の消費国でした。イルカが大量に砂浜に上陸し住民がその肉を食べたという事実をとらえて、日本人がイルカを追い込んで捕獲したのだと、西洋のマスコミが理解したのは、このような背景があるからなのです。

イルカ・鯨の肉を食べる野蛮人だと、日本人は非難されたわけです。食慣習の相違が、文化摩擦を引き起こし、それがひきがねとなってこのようなジャパン・バッシング（日本たたき）が行われたのです。

## 3) 鯨肉食の歴史

日本における鯨肉食の歴史を見ておきたい。新しいところからいうと、まず、第一に、学校給食における鯨の竜田揚げ、をあげることができます。商業捕鯨禁止以前は、全国的に鯨が給食のメニューになっていました。商業捕鯨禁止から26年。今は一部地域のみで食されるものとなっています。第二に、戦後食糧難時における鯨肉食をあげることができます。戦後～1960年代半ばまで、肉類のなかで鯨が最も多く食べられていました。

そして、第三にあげたいのが、福沢諭吉（1834～1901）の「肉食之説」です。福沢については、説明の必要がないと思います。1860年渡米（幕府使節の一員）、61、2年渡欧（同）、67年渡米（同）。66～69年『西洋事情』を書き、また慶応義塾を創立し、文明開化・洋化の担い手となった大思想家です。この福沢が、1870(明治3)年、36歳のときに書いた「肉食之説」に着目したいと思います。次に挙げたのがその全文です。そのなかで福沢は五穀草木と肉類をバランスよく摂取しなさいと主張しています。バランスのとれた食事のすすめ、これは今日の我々からみれば、当然のことです。福沢はいう。

古来我日本国は農業をつとめ、人の常食五穀を用ひ肉類を喰ふことまれにして、人身の栄養一方に偏り自から病弱の者多ければ、今より大に牧牛羊の法を開き、其肉を用

ひ其乳汁を飲み滋養の欠を補ふべき（以下、略）

福沢によれば、日本に住む人々は五穀を常食とし、肉類をあまり食べなかった。だから栄養のバランスがくずれて、病弱のものが多くなったのである。福沢はこのように現状を認識し、これから牛や羊の牧畜をはじめ、その肉を食べその乳を飲んで栄養をつけなければならぬと主張しています。実は「肉食之説」は築地牛馬会社という牛乳製造会社の広告文（今日流に言えばコマーシャル）なのです。

ちょうどこの年、5月から6月にかけて、福沢は腸チフスを患い死ぬか生きるか、生死の淵をさまよう大病にかかっています。だが8月には全快。福沢はつぎのように言っています。「なぜ助かったのか、振り返ってみれば、築地牛馬会社の牛乳を始終飲んで「生力の元」を養っていたから、医薬も効果があったのだ。実に牛乳は熱病に欠かせないものです。なんとかして、私ひとりだけでなく、ひろく世の中の人にその効能を知らせたいものだ。」このように栄養の源としての絶大な効能を人々に教えるために、福沢はこの「肉食之説」を書いたのです。なんだ、そんなこと当然ではないか、牛乳が体にいいことなんか常識ではないか。なにをいまさらそんなことをいうのか、と我々は思うでしょう。

ところが、福沢はいう（さきの下略部分）。

（其肉を用ひ其乳汁を飲み滋養の欠を補ふべき）筈なれども、数千百年の久しき、一国の風俗を成し、肉食を穢たるものの如く云ひなし、妄に之を嫌ふ者多し

日本にいるすべての人が肉を食べ乳を飲んで栄養をつけるべきなのに、実際には、肉食をけがれたものとしこれを嫌うことが日本の風俗となっていると、福沢は嘆いています。どうして肉食を忌避するのか。その理由を挙げて、批判しています。その一つに鯨が出てくるのです。「抑も其（豚牛の）肉食を嫌うは豚牛の大なるを殺すに忍びざる乎。牛と鯨と何れか大なる。鯨を捕て其肉を喰えば人これを怪まず」と。「鯨を平気で食べていながら、牛肉を食べないのはなぜか」という疑問を、福沢は投げかけているのです。明治の初めに鯨を食べながら獣肉を食べない食習慣が成立していることがわかります。

福沢は肉食の流布を妨げるこの風俗を徹底的に批判し、「願くば我国人も今より活眼を開き、牛乳の用法に心を用ることあらば、不治の病を治し不老の寿を保ち、身体健康精心活発、始て日本人の名を辱しめざるを得べし」と、この文章を締めくくっています。

福沢は文明開化・洋化の担い手であり、啓蒙思想家でした。3度欧米に行き、その文化に触れ、それを積極的に導入しようとしてしました。その際、導入を妨げるような考え方や風俗を、迷信であり、あやまった風俗であると厳しく批判しています。肉食の導入とそれを妨げる日本の風俗への攻撃は、その一つの例だといえます。

こんにち、我々は肉を食べ、乳を飲んでいます。同じ牛の肉でも、外国の牛肉よりも和牛のほうが柔らかいね、とかいって、和牛という牛が日本には昔からいて、それを食べていたと考えがちです。ですから、福沢がやっきになって主張していることが全然理解できないのです。

果して、本当に日本に住む人々は肉食をあまりしなかったのでしょうか。福沢がいうよ

うに肉食を穢れたものとみなすのが日本の風俗となっていたのでしょうか。福沢のいうことが事実だとしたら、どうしてそういう風俗が形成されたのでしょうか。歴史を振り返ってみる必要があるのです。

鯨肉食の歴史に話しを戻しましょう。第四にあげたのが、江戸時代の本草書（薬学書）『本朝食鑑』（人見必大編、元禄 5 年(1692)自序）です。この本は今日では平凡社の東洋文庫に現代語訳されて入っております。食物百科辞典として使われ、最近では話題の塩麴<sup>しおこうじ</sup>はこの本に出ていたのを、麴屋さんの女将さんが発見されたものです。この書物の鯨の項を見ると次のようにあります。

要点を列挙すると、1. 鯨。鱗の部すなわち魚の仲間とされ詳しくは「江海無鱗」海にいる鱗がない魚に分類されている。2. 寄鯨。鯨・イルカの上陸が江戸時代に起きていてそれがその地域の人びとにとって嬉しいことだったことがわかる。3. 華人すなわち中国の人は鯨を捕らない、食べない。李時珍編『本草綱目』（万暦 24 年 [1596] 刊行）には、鯨の主治（効能）や形色について言及していない。4. 日本では柿本人麻呂の歌（『万葉集』巻 2）や笠金村の歌（同巻 3）に「いさな取る」とあり、勇魚（鯨の古名）を食べていたことがわかる。5. 肉を食べるだけでなく、ヒゲ・骨・皮などを活用している。

鯨肉食の歴史の最後にあげたのは、能登半島の真脇遺跡です。この日本列島に住んだ人々が、いつごろから鯨類を食べたのか。考古学の発掘によれば、今から 5000 年程前、縄文時代前期末～中期初めの真脇遺跡から、イルカの骨が出ています。なんと 282 頭分のイルカの骨が発掘されています。このころからすでに鯨類の肉を好んで食べていたのです。

このように、この列島の住人は、縄文時代以来鯨類の肉を食べ続け、その体の骨・皮・ひげのすべてを活用して現代に至っています。同じ東アジアでも中国は鯨の肉を食べる風習はなかったらしい。朝鮮半島では一般には食べないと言われますが、南部の海岸部では食べていると留学生から聞いたことがわかります。ヨーロッパでは、イギリス・フランスでは、16 世紀ころまでは鯨肉は珍重されたらしいが、その後は食べなくなった。アメリカでも、アラスカのエスキモーをのぞいては、鯨肉は食べません。という、まてよと思われる方もあろうかと思えます。19 世紀、アメリカは世界有数の捕鯨国であった。高校の日本史の教科書にも出てくるように、捕鯨のために太平洋をわたり、日本近海にまでやってきたのです。鯨を食べないのになぜ捕鯨をするのか。欲しかったのは、鯨の肉ではなく、脂肪です。鯨の脂肪から灯油や石鹼を作ったのです。その後 19 世紀後半から 20 世紀、石油を利用することが普及し、また電灯が広まり始めると、欧米の人々にとっては捕鯨は無用のものとなったのです。

#### 4) 日本と欧米一人と動物の関係—

以上、鯨の肉を食べる日本人、牛肉を食べる西洋人、というように食文化の相違はかなり根の深いものであることが分かります（とはいえ、商業捕鯨が禁止されて四半世紀、日本でも鯨を食べたことがない人、食べたくない人が増えてきています。食文化は変わりにくいと思われてきたが、そうではないのかも知れません）。食文化の相違が国際摩擦を引き起こすことから、食文化がいかにナーバスなものか思い知らされます。

ご存知の方もあるかと思いますが、毎年 4 月から 6 月に捕鯨問題が話題となります。国

際捕鯨委員会（IWC）総会がこの時期に開かれるからです。IWCは、もともとは捕鯨国の集まりで、乱獲によって鯨が急減しないように、捕鯨国が捕獲頭数を割り当て資源を保護していこうという主旨のものでした。それが、アメリカが60年代に捕鯨を止め、その後、捕鯨に反対する反捕鯨国がこの委員会に加盟するようになって、委員会の性格が一変した。現在では捕鯨国と反捕鯨国との闘争の場になり、毎年おおもめにもめています。1992年のグラスゴー大会では、大会前日の反捕鯨団体の集会でイギリスの下院議員が「もし本当にそれらの国の人々が珍しい（エキゾチックな）ものを食べたければ、鯨よりもお互い同士を食べあうべきだ」と過激な発言をしたことが話題になりました。近年は日本政府が行っている調査捕鯨に対する妨害行為が毎年話題になります。和歌山県の太地のイルカ漁を隠し撮りした映画『ザ・コーブ』の日本での上映をめぐる問題もありました。なぜ、イルカ・鯨を捕ること、食べることがこれだけの批判を浴びるのか。なにか納得できないものを感じながら、「もう食べない人が多いのだから、捕鯨をやめたら良いのでは」という意見を持つ若者も増えてきております。それは一つの選択肢だと思いますが、その前に、もう少し考えてみたいことがあります。それは欧米人が牛を屠殺しその肉を食べながら、鯨・イルカに対しては一転して保護・愛護を唱えるのはなぜかということです。動物屠殺と動物愛護が同居している。どうしてこのようなことが可能だろうか。欧米の人びとが人間と動物との関係についてどう考えているかみていく必要があります。これについては西洋史家の鯖田さんが、半世紀程まえの『肉食の思想』（中公新書）のなかで興味深い議論を展開しています。

鯖田さんによれば、西洋人の考え方の根本は、キリスト教にあります。キリストの聖書の一つ『旧約聖書』には、人の創造、動物の創造、人と動物の関係について次のようになっています。「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」人に向かって神はいわれた。

生めよ、ふえよ、地に満ちよ。地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう（「創世記」）

神は自分の似姿に人を造った。地上のあらゆる動物は、人の支配に服す存在、人の食物となる存在なのです。キリスト教社会では、魂はしばしば精神や理性と同じ意味で扱われ、魂を持つものは人間だけです。人間だけが神により救済され、また破滅を宣告される可能性を持っているのです。人と動物は共に神の創造物でありながら、人と動物は全く断絶したもののなのです。理性を授けられた人間は、一方では動物の世話をすることを期待されていたが、同時に動物を好きなように利用する権利をも持っています。西洋人の動物の取り扱い方は、その動物にどういう性質を当てはめるかどうかによって異なるのです。

ではイルカのイメージは？というところ、イルカは、ギリシア神話では救済者とされ人間の魂を持つものといわれます。キリスト教世界では、イルカはキリストの救済と復活の象徴であり、キリスト自身の象徴でもあるのです。またイルカを含めた鯨は哺乳類であり、海に住む動物のなかで最も高等な動物です。脳の重さはハンドウイルカでは2キログラム、

全体重の 1.2 パーセントを占めます（ちなみに人間は約 2 パーセント）。脳神経のなかでも、聴神経がもっとも発達し、仲間との交信、物体の察知など、水中音を利用して行っているとされますが、まだよくわかっていません。こうして、欧米人にとって、イルカ・鯨は神秘的なもの、畏敬すべきもの、かわいいものなのです。だから欧米人にとってイルカは愛護すべきものであって、屠殺の対象にはなり得ないのです。一方、牛や豚といった家畜は、『旧約聖書』にもあるように、人の食物として神が造って下さったもの、食べ物なのです。このようにキリスト教を信仰する人たちの間では、動物愛護と動物屠殺はなんの矛盾もなく同居しているのです。

それに対し、日本列島に住む人びとは、人と動物との関係をどう考えているのでしょうか。「供養」という儀式に着目するとそれがわかります。供養とは、先祖供養という言葉からわかりますが、死者の霊に供え物などをして、その冥福を祈ることです。ところがおもしろいことに、家畜供養、鰻供養・・・というように、供養は人の霊、魂だけでなく、動物であれば昆虫から鯨までの供養が日本全国で行われています。公園や広場の片隅に供養碑（慰霊碑とも）がたっているのをみたことがあると思います。大学でも、医学部等、実験動物を扱っているところでは、供養碑を建立して供養の儀式を行っています。医学の最先端を担っている研究施設で、「医学の発展のために犠牲になった動物の御霊（みたま）に」感謝する儀式が行われているのですが、これは欧米ではあり得ないことです（動物園での動物供養も同様に、欧米ではないことです）。さらにこの列島では針供養と筆供養というように供養は無生物にまで及びます（人だけでなく動物や物にも魂を認める考え方は、アニミズムと呼ばれるものであり、日本列島だけではなく、アジアやアフリカの各地で見られるものですが）。

さて、鯨漁を行っている地域では、鯨供養が行われています。日本有数の捕鯨基地であった宮城県の鮎川では、観音寺で供養が行われています。祭壇には位牌が安置されていますが、位牌には海で死んだ漁師や捕鯨者の位牌とともに、鯨の魂を祭った供養碑があり、一緒に置かれているのです。鯨供養は毎年八月に行われています。捕鯨に従事して死んでいった人間と犠牲となった鯨の生命に対して、哀惜（哀れみ）の気持ちを表現するもの、冥福を祈るものです。ここから人と鯨の魂は全く同等の扱いをうけていることが分かります。捕鯨を生業にしている人々にとっては、自らの生活、食料のために犠牲となった鯨は、同時に供養によって救済すべきものなのです。

キリスト教社会では人と動物との関係を断絶していると考えのに対し、日本人はそれを連続させて捉えているのです。これは、宗教の相違だと言っていると思います。キリスト教世界と非キリスト教世界の相違です。西洋人はイルカ・鯨の肉を食べる野蛮人だと、日本人を非難します。だが非難された日本人は、なぜ鯨の肉を食べることが野蛮な行為なのか理解できません。なぜ理解できないかというと、いま述べたように宗教、人と動物との関係に関する考え方が全く異なるからです。何を「野蛮」な行為とみなすか、その尺度が異なっているのです（法学部の青木人志氏の『動物の比較法文化—動物保護法の日欧比較—』有斐閣、2002年、を参照して下さい）。

以上のように、イルカをめぐって引き起こされた国際摩擦が、表面的には食慣習の相違により、根源的には宗教の相違に因るものであることがわかりました。われわれにとって、

重要なのは、この違いを理解した上で、この摩擦をどう解消していくかです。それぞれが考えていかなければならない大きな問題だと思います。

これを導入として、講義では、「食」という視点から人類史をたどっていくことになります。人類はいつから、他の動物とは異なる人類となったのか、がまず問題になります。

太閤検地論争で著名な安良城盛昭さんは、晩年、人が家畜を所有したことを人類史の起源として位置づけましたが、正しい指摘だと思います（安良城盛昭『天皇・天皇制・百姓・沖縄』吉川弘文館、1989年）。「家畜はいつから家畜なのか」という問いは、キリスト教社会では問いにはなりません（聖書には神が家畜を創造したとあるから）。しかし、進化論の立場にたてば、人が気の遠くなるほどの長い年月をかけて野生動物（野生植物も同様）を家畜化したのです。家畜とは、人の生活に役立てるために野生動物を遺伝的に改良した動物であり、家畜をエネルギーとして活用するようになった時から、人類としての歴史が始まったといえるのです。最初の家畜は犬でした。3万年前にネアンデルタール人が犬を飼っていたことが発掘からわかっています。犬の家畜化に成功した人類は7000年前～5000年前ぐらいに牛や馬、らくだ、羊等々の家畜化に成功し、また同じ時期に野生植物の栽培化も行われ、農耕と牧畜が始まる。エネルギー活用の文明段階に入り、現在にまで至っているのです。

興味深いのは、日本列島では、大型哺乳類の家畜化は行われていないことです。これは、考古学の佐原真さんが指摘していることですが、縄文時代に犬が持ち込まれ、4～5世紀に馬と牛がこの列島に持ち込まれたことがわかっております（佐原真『大系日本の歴史1 日本人の誕生』小学館、1987年）。牛が持ち込まれたにもかかわらず、牛を繁殖させて食べるというような牧畜は、この列島では現代に至るまでついに成立しなかった。日本の農業は、世界でも特異な非牧畜農業だったのです（拙稿「農業の思想」岩波講座『日本思想』四、2013年）。講義では、これを押さえた上で、福沢諭吉が述べたような肉食を忌避する通念がいつどのように形成されたのかを考察していく。日本列島に生きた人びとの生き様を、ときに他地域と比較しながら、原始から現代までをたどっています。「通史」という言葉があります。日本史の通史は、網野善彦さん（『日本社会の歴史』上・中・下、岩波新書、2007年）を最後にやる人はいなくなったと言われていました。研究はどんどん細分化されていて、近世という時代の通史さえ描ける研究者は少なくなってきております（水林彪氏の近世通史『日本通史Ⅱ 近世』<山川出版社、1987年>が最後かも知れません）。私が作った「食から文化を考える」という講義は、次のシラバスからもわかるように、日本列島を生きた人びとの歴史を通時代的に描いた通史でもあることを強調しておきたいと思います。

はじめに	
一 「食」から文化を考える～イルカの「集団上陸事件」から	
二 日本と欧米～人と動物との関係	
三 動物愛護と慰霊	
四 家畜の文化史～家畜とは何か？家畜はいつから家畜か？	
五 日本列島における家畜の文化史～縄文犬	
六 馬の文化史～古墳時代を考える～	
七 牛乳の文化史	
八 古代「日本」の形成～天武の肉食禁止令～	
九 王朝貴族とケガレ意識	
十 インドと日本～ケガレの比較文化論的研究～	
十一 仏教と性差別	
十二 中世国家と仏教	
十三 ハンセン病と現代	
十四 仏教の光と影～日本の中世社会を考える	
十五 殺生禁断と武士～鎌倉時代から「生類憐み」の時代まで	
十六 「武士道」の形成～近代日本の国家と宗教	
十七 日本本草学の光と影	
十八 牛鍋と菜食主義 ～インドと日本の近代化をめぐる比較 むすびにかえて	

比較史  
比較史  
人類史  
日本列島の社会史：縄文～弥生時代  
古墳時代  
古代  
古代  
古代（平安時代）  
比較史  
中世  
中世  
現代  
中世  
中世～近世  
近代  
近世  
近代・比較史

各章の内容を説明している余裕はありませんが、食という問題は、宗教はもちろんですが、政治・社会・経済・文化・思想に関わってくるので、それぞれの時代や社会の像（イメージ）をとらえることができるのです。

**2. なぜ肉食を問題にしたのか～はじめは安藤昌益から**

**1) 昌益の肉食禁止論**

そもそも私がなぜ肉食を問題にしようと思ったのか。そのきっかけについて少し話しておきたいと思います。

冒頭でも述べましたが、私は卒業論文以来、一貫して安藤昌益という思想家の思想形成過程を解明する研究を行ってきました。昌益とは、高校の日本史の教科書にも「八戸の医者安藤昌益は『自然真営道』をあらわして、万人がみずから耕作して生活する自然の世を理想とし、武士が農民から収奪する社会や身分社会を否定し、封建制を批判した」（『詳説日本史』山川出版社、1998年版）と特筆される思想家です。ハーバート・ノーマンのノーマン『忘れられた思想家——安藤昌益のこと——』により、戦後よく知られるようになり、教科書にも載せられようになったこの思想家の生涯は、実はまったく謎に包まれていました。一九七〇年代以降、地域に密着した研究者による地道な史料掘り起こし作業により、その生没年が元禄一六（一七〇三）～宝暦一二（一七六二）であること、秋田藩領出

羽国秋田郡二井田村（現秋田県大館市二井田）の上層農民の出身であること、生涯の一時期八戸藩領陸奥国三戸郡八戸町（現、青森県八戸市）で町医者をしていたという事実がようやく明らかにされてきているのが現状です。昌益は経歴が不詳のため誰に師事して学問を学んだのかわかりません。またどのような書物を読んで学問を学んだのかもわかりません。昌益と既成の思想との継受関係は素朴な形ではなにひとつわからず、昌益はいわば孤立した思想家として我々の前に投げ出されているのです。ところが、当然のことながら昌益は読み書きの基本的な教育やなにがしかの医術の手ほどきは受けたはずですし、いくつもの書物を読んだはずですが、したがって、昌益がどこでどのような教育を受けたのかという伝記的事実の発掘作業を行うとともに、それと並行して、昌益が残した著作類の語句を詳細に分析することによって、昌益がどんな書物を読んだのか確定していかなければなりません。昌益の著作を見ると、昌益は儒学・仏教・神道・音韻学・医学・本草学等々の既成の諸学問を厳しく非難・否定しています。昌益はそれらの諸学問についてなにがしかの知識をもっているのです。どうやってその知識を入手したのか、昌益自身はほとんど語っていないものの、何らかの情報源があったはずですが、そこで著作中の一言一句に注目して、それを昌益が見ることが可能であった（昌益と同時代あるいは前代の）書物と比較対照する作業を根気強く積み重ねることによって、昌益が確かに読んだ書物を明らかにできます。昌益の読書歴を解明できれば、昌益がその書物から何を学んだのか、何を継承し何を否定していったのかという昌益の思想形成の過程に肉薄できます。こうして私は、これまで昌益が確かに手にとり、読んだ書物をいくつも明らかにしてきました。

1988年のことです。当時、東北大学で助手をしていた私は、「安藤昌益の本草学一肉食をめぐって」という論文を書きました（『日本文化研究所研究報告』25、東北大学、刊行は1989年3月、のち『安藤昌益からみる日本近世』東京大学出版会、2004年、に収録）。そのなかで私が問題にしたのは、昌益の肉食禁止論です。昌益は、鳥・獣・虫・魚類の「四類は四類の食物也。故に人の食物に非ず。之れを食ふことを停止す。人に備ふる食は穀・菜種の類也」（稿本『自然真営道』巻25）と述べ、肉食を停止し穀・菜を食べよと説きます。このような肉食禁止の思想を昌益がどのように形成したのか、肉食をめぐる昌益の思索の跡をたどろうとして、苦労しながら書いたのがこの論文です。その考察がどのような歴史叙述として結実したかについては、直接、その論文に当たっていただくこととして、ここでは、考察のプロセスを振り返っておきたいと思います。

さきにも述べましたが、昌益は医者で、とりわけ内科を専門としており、薬学に関する知識を持っていました。私が昌益が学んだ薬学を調べたところ、昌益が、中国の李時珍編『本草綱目』を熟読し、また香川修徳の『一本堂薬選』も読んでいたことがわかりました。肉食についていえば、中国の本草書である『本草綱目』には、肉食を禁止する記述はありません。一方、『一本堂薬選』の香川修徳（1683～1755）は、意外に思われるかも知れないが、肉食が体に良いとして肉食奨励の論陣を張っていました。とすると、昌益は、肉食奨励の本草書を読んでいながら、まったく逆の結論を出したことになるのです。どうしてこのようなことが可能となったのか、が問題になるのです。

まず、注目したいのは、昌益が李時珍の『本草綱目』を次のように批判していることです。中国の古代の伝説の一つに、聖人である神農が農耕業を民に教えたというものがあり

ます。李時珍が『本草綱目』にこれを引き、神農出現以前の人びとは、農耕を知らず、「毛を食ひ血を飲みて生を持つ」、肉食のみをして生きてきたと述べたことを、昌益は厳しく批判します。もし五穀を食べず「獣鳥の肉のみ食ふ則は、三十日にして腫れ毒の悪病発し糜腐して死す也。予近く例して之れを視る所也」（稿本『自然真営道』巻4）、獣や鳥の肉ばかり食べる時は三十日で腫れ毒の悪病が起こり、腐って死ぬ、私はそれを間近く目撃したのだ、と述べます。昌益が体験したのは、「今世にも寒歳に耕穀登らず。米穀絶無なる」（『統道真伝』）状況、すなわち1740年代半ばから50年代にかけて北奥羽地方を襲い多くの餓死者を出した大凶作・大飢饉でした。昌益はこの大飢饉の体験を踏まえて、人は五穀を食べるべき存在で肉食すべきでないと言き、五穀を食べる人は「五穀の精」から生成したのだという独自の生成論を形成していったのです。

## 2) 肉食禁忌の民俗（フォークロア）

このように、一方で書物の知識の享受、他方で現実体験のなかの思索、この両方があるまわって、上述のような肉食を忌避する昌益の思想が形成されたといえることができます。しかしながら、これで一件落着としていいのか。昌益の思想形成の過程の全体を捉えたことになるのか。気になるのは、肉食を禁忌とする意識の存在です。

鳥肉と獣肉は維新前までは四足二足と称へて、食べると身体が穢れるか、口でも曲がるかのやうに思つたものだ、若し薬用にでもする者があつて食べる場合は何処かに隠れて狐鼠々々と食べて、後では切火などしたものだ

（佐藤源八「南部二戸郡浅沢郷土史料」）

これは北奥羽の二戸郡浅沢（現岩手県二戸郡安代町）で戦前採集された民俗資料であり、江戸時代における当地域の肉食の状況を伝えています。肉食は「身体が穢れる」「口が曲がる」と忌避され、食べる場合は合火（同じ火をつかって料理を作り食べる）を避け人目につかないようにこそこそと食べたといひます。同様の禁忌は北奥羽の多くの地域で報告されており、肉食は忌避されています。

肉食の禁忌は、特にカミ（神仏）祀りと関わって説かれます。吉田三郎が収集した資料「男鹿寒風山麓農民手記」（現秋田県男鹿市）には、「オガネ様の日にナマクサ物を食ふと口が曲がる。オガネ様とは庚申様のことです。又ナマクサ物とは魚や肉や卵その他葱類一般のことです」という「言伝へ」を載せています。実際、庚申講で読誦された庚申の「縁起」には精進すべきことがうたわれます。たとえば、秋田県大館市二井田の一関家に伝わる享保九年（1724年）の年記をもつ『庚申之御縁起』（『大館市史』4、1981年）では「庚申を待申人ハ寿命長して子孫はんしやうす。一切の生有ものころさす。五辛、二足、四足をくわす、ねむる事なし。此夜ハ心を静に致、看経おして余念なく守り申せは、三年の内にハ諸願叶もの成り」と肉食は禁忌とされています。窪徳忠による庚申信仰の全国調査によれば、肉食をすれば「口が曲がる」というような伝承や習俗は「概して東北地方に厳格」だといひます。窪氏が紹介している弘前市の事例では「小生の生家における庚申信仰の模様申上候、家内四足二足及び鶏卵は平素ともに食はず、庚申の日には特に精進いたし候」（大正四年<1915>書簡）と、肉食の禁忌は庚申の日に限らず平素にも及びます（窪徳

忠『庚申信仰の研究―日中宗教文化交渉史』日本学術振興会、1961年）。6

肉食を忌むカミは庚申だけではない。北奥羽にはオシラサマ、オコナイサマなどと呼ばれるカミ（以下、オシラサマ）が分布しており（楠正弘『下北の宗教』）、このカミを祀る家では「四足二足の肉は一年中食べてはいけないとされている」（及川和子「岩手県南地方の養蚕信仰とオシラサマ」）。この禁を犯し肉食した場合には、庚申と同じく、「口が曲がる」と言伝える（三崎一夫「オシラ神」）。二つのカミは、祀る地域・家によって、農神、養蚕の神、福の神、病気平癒の神、諸願成就の神、漁業の神・・・等々、多様な属性を持つカミとされ、現世利益を求める民衆に受け入れられました。村落レベルで庚申の祭礼を担ったのは各村落を掠（かすみ）として支配する修験（山伏）であり、同様にオシラサマの祀りを指導・執行したのは、主として巫女（イタコ、オガミサマ、ゴミソなどと呼ばれる）でした。このように北奥羽地域では、カミ信仰と密接に関わって、肉食を忌避する意識が浸透して民俗（「伝承」とも。英語では *folklore*）となっていたのです。

このように、肉食の忌避は庶民の信仰生活に深く関わっていました。だが、母屋の竈を使わないで別火で煮炊きして食べるのはかまわないとか、兎は一羽二羽と数えるから「二足」に属するとこじつけて食べていたというようなさまざまな便法が伝えられていることが示すように、肉食を全くしなかったわけではありません。くわえて東北地方の北部地域（北奥羽地域）は過酷な自然条件にも災いされて凶作が続き、大凶作年には飢饉になりました。特に太平洋沿岸地域は現在でもやませによる冷害に悩まされており、技術水準が低い江戸時代には慢性的といってもいいほど凶作に襲われました。八戸藩の勘定頭を務めた北田忠之丞は、安藤昌益の弟子としても知られる人物ですが、彼は飢饉誌『天明凶歳録』を執筆し、次のようにいいます。

在々次第に食に勞れて、犬猫鶏様の物をも喰仕廻、其後は馬を殺して食事とし、或は人の馬を盗み、又は買調ひ食するもあり

大凶作の年には、稗・大豆などの雑穀を食い果たすと飢餓者は犬・猫・鶏などの肉を食べ、それも尽きると持馬を殺したり人の馬を盗んだり買ったりして馬肉を食べたという。凶作下では生きるために肉食を余儀無くさせられたのです。飢饉誌のなかには「我等は羽黒湯殿山大峯も駈候而、四足、忒足を禁候故、譬肉食不致餓死仕るとも不喰と我を張通し喰不申候」（松橋治三郎『天明卯辰築』）と、修験の教えを守り肉食を拒否した人の話もみえます。だがそれは少数であり、多くの飢餓者は家畜である馬肉を食うところまで追い込まれ、さらには「馬も次第にくひ果し、詮方なき余りにや死したる人の肉を食するもの 在々所々に多し」（『天明凶歳録』）、人肉食いまであったと書き記しています。忌避しながらも、肉食抜きでは食生活が完結しない現実があったのです。

昌益に話を戻すと、昌益の肉食忌避の思想は、北奥羽の民俗を継承しているようにみえます。実は昌益は「米は神也」（統・万国）「唯心の弥陀、己身の浄土と云ふは米穀也」（統・糺仏失）と、米穀を神仏視するが、これについて、安丸良夫は昌益が「米をボサツと呼ぶような民俗的観念をふまえて」と指摘しています（安丸良夫「生活思想における『自然』と『自由』」『講座日本思想』1、東京大学出版会、1983年、のち『安丸良夫集』1、岩波書店、2013年）。三宅正彦も、昌益が生まれた二井田村枝郷四羽出に伝わる「念仏」と呼ばれる御詠歌に「水田稲作のイメージと仏の救いのイメージが、みごとに複

合している」として、この観念と昌益との関連を指摘しています（三宅正彦「安藤昌益の思想形成と風土的基盤」『民族芸術研究所紀要』3、1977年）。昌益の米・五穀に関する思想についても、米の再生産過程にたずさわる農民の米にまつわる民俗に相通じているのです。

こうして昌益は、民俗の継承者としての相貌をもって我々の前に立ち現れてきます。民俗が思想形成の重要な契機として浮上してきたのです（なお、民俗が昌益の思想を生み出した重要な基盤であると主張し、生涯にわたって大館市二井田に通い民俗誌を編んだのは、三宅正彦であった。三宅編『安藤昌益の思想的風土・大館二井田民俗誌』そしえて、1983年）。

### 3) 民俗との葛藤、その形成の背景

では、昌益は肉食を忌避する民俗をストレートに踏襲したとみてよいのか。昌益が次の発言をしています。

山伏の子孫、肉食を為す則は口枉がると云ふ。己れ心思の疑迷・恐着、他に非ず  
（『統道真伝』）

肉食をすれば口が曲がると信じるのは、心の迷いによるもので、それは何の根拠もなく迷信に過ぎない。このように昌益は修験が獣肉忌避を説いていたこと、それが当時の社会通念となっていたことを知って、それを批判しており、昌益は民俗への批判者としての顔もみせている。すなわち、昌益が民俗にどっぷり浸かって思想形成をしたと見るのは正しくない。昌益の思想形成の過程を考えると、その生活圏の民俗をどう継承しどう克服していったのか、という視点が不可欠となるのです。

くわえて考えておかねばならないのは、民俗もまた時代の中で形成されるということです。たとえば、日和見の民俗も、小池淳一さんが明らかにしているように、近世に出版された『東方朔秘伝置文』・『大雑書』等の書物の知が、民衆の生活に大きな影響を与えて民俗になっていた（小池淳一『陰陽道の歴史民俗学的研究』角川学芸出版、2011年）。肉食の忌避についても、先には昌益の生活圏であった北奥羽地域の民俗としたが、実はこれは北奥羽限定ではなく、九州から東北までに共通の民俗であった。この民俗の形成には、近世に出され続けた『神祇（道）服紀令』等の仮名書きの服忌書の影響も大きい。直接には17世紀末～18世紀にかけての権力者の施策が果たした役割が大きい。すなわち、五代将軍徳川綱吉の生類憐みの令と服忌令が、民衆レベルにまでケガレ意識を定着させ、獣肉を扱うことを義務づけられた被差別民への差別的見方が社会に浸透していったのです（高埜利彦『日本の歴史13 元禄・享保の時代』集英社、1992年、若尾「享保～天明期の社会と文化」大石学編『日本の時代史16 享保改革と社会変容』吉川弘文館、2003年）。この民衆レベルまでというのが大事です。ケガレ意識そのものは、10世紀の『延喜式』にもケガレ規程が載っていて、その時代にあったのですが、そこでは京の都に住む王朝貴族のみが守っておりました。それがこの時代には民衆レベルにまでケガレ意識が定着したのです。

昌益は、獣肉を忌避する意識が社会通念となり民俗となった18世紀に生きたのです。私が、拙稿「安藤昌益の本草学」の歴史叙述を、幕府の被差別民政策から書き始めたのは、幕藩領主の施策まで視野に入れないと、昌益の思想形成の意味が見えてこないと考えたか

らです。また、獣肉忌避の社会通念化した状況で、冒頭でも述べたように「病気にかかったときに飲む薬に、動物の肉に由来するものが使われていると、その服用を拒否する人さえ」出た。そうしたなかで、18世紀前半を生きた香川修徳が、『一本堂薬選』という薬学書のなかで獣肉の効能を説いていたことには驚嘆させられました。獣肉忌避が通念化しているなかで、なぜ修徳にそのような態度を取ることができたかという、彼が『本草綱目』を学んでいたことをあげることができます。『本草綱目』は中国で肉食が行われていたことを教えてくれ、日本列島の住人たちが囚われた獣肉を忌避する意識を相対化することができたのです。『一本堂薬選』で修徳は、『古事記』等の文献を引いて、かつては獣肉を食べていたといい、獣肉をケガレとして忌避するのは仏教伝来に始まるとみなします。そして、獣肉忌避の社会通念に呪縛されて寿命を全う出来ずにいる状況を歎き、いまこそ肉食をすべきだと呼びかけているのである（ちなみこの肉食無穢論は、被差別民が『河原巻物』において、差別の不当性を訴えるときの論拠になっていきます）。福沢と同様の主張をした人が、福沢の百年以上前にいたのです。福沢が、洋化の時代であり政府も肉食を奨励するというなかで肉食奨励を説いたのに対し、修徳の場合は逆風のなかでの発言でした。彼を非難罵倒する史料はいくつも残っています。時代はくだりますが、近世後期の儒学者太田錦城（1765～1825）は、「香川修徳と云へる者、邦人は獣肉を食はざる故に虚弱なり、などと云ひおどせし故、近年は山国の人のみならず、海辺の魚肉多き処まで皆々好んで食ふことにはなりたり。今は江戸などにも、冬月に獣店おびただし。そが故に、悪瘡を發し、中風に類する病を發する者少からず。（中略）目出度き風俗の都なりしを、大に香川の為に破られたり」（『梧窓漫筆』1808年序）と、修徳の名をあげ非難しています。通念に異を唱えることがいかに厳しいものであるかがよく分かります。香川修徳の同業の医者たちも、『本草綱目』を読んでいながら、「畜類は穢物にして君子食はざる所の者なり」（名古屋玄医『関甫食物本草』）などといい、通念にしたがい、獣肉に由来する薬種を自らの薬の本に入れていません。肉食忌避の通念がいかに強固であったかがわかります。

### 結びにかえて

安藤昌益に話を戻しますと、昌益は結局のところ肉食忌避の通念を取っていることになります。香川修徳の『一本堂薬選』を読んでいながら、最終的にそのような判断をすることになった彼の思想形成の過程（それは葛藤の連続だったと思うのですが）に私は迫ろうとしました。そうして書き上げたのが、先の昌益の本草学に関する論文です。それを書いていくなかで、時代を18世紀に限定せず、前後に延ばして肉食の問題を考える必要があるのではないかと、そうしないと昌益を理解できないのではないかと。こう考えて作りだしてきたのが、「食から文化を考える」という通史的な授業なのです。

以上のように、食文化は一見分かりやすいのですが、実は非常にナーバスで複雑なものであることを私は述べてきました。取っつきやすいようにみえて、実は、さまざまな文化・思想が分からないと食文化は理解できない。食文化は、基礎問題ではなく、応用問題だというのが結論でしょうか。

最後に、今回の一橋大学附属図書館企画展示（テーマ「お肉のススメ～肉食禁忌と食の文明開化～」平成25年(2013)11月1日～29日）は意欲的な展示だと思います。今回の展

示の、一つひとつの展示物を、その背景というか背後に何があるのか、を考えながら見ていただければ、面白いと思います。ご静聴、ありがとうございました。

【附記】ご存知の方もおられるかと思いますが、本学も展示等（たとえば「駒井重格の軌跡～専修大学の創立者、一橋の名校長～」〔桑名市博物館・専修大学・一橋大学共同企画展〕）でお世話になった青木美智男さん（専修大学名誉教授）が今年（2013年）の7月に旅先で急逝されました。青木さんは、近世日本文化史の開拓者であり、衣食住を対象とした生活文化史を提唱されていました。晩年の青木さんは講演の際にはかならず原稿を配布されました。本講演では、食文化を考えるということで、青木さんの颯みに倣って原稿を書きました。慣れないことゆえ、文章が練れていない部分や誤字脱字も多いことと思います。ご容赦いただきたく思います。なお、青木さんは、『全集日本の歴史 別巻日本文化の原型』（小学館、2009年）や遺著となった『小林一茶一時代を詠んだ俳諧師』（岩波新書、2013年）といった多くの著作を残して下さいました。是非とも手にとって読んでいただければと思っております。